
リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜

【Nコード】

N2725Z

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

赤夜叉さんの許可をもらって書きました。

赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは』〜魔法少女と銀髪の侍〜と黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』を参考に書いています。

天人によって侍は衰退の一途をたどっていた。

そんな中、己の侍魂を決して曲げぬ男が一人居た。その男の名は坂田銀時。この物語の主人公である。

銀時には相棒がいる。だが、人ではない。

銀龍と言う刀がある。

普段は姿を見せず、銀時が任意したとき、銀時がピンチの時に姿を現す。

銀龍はただの刀ではなく、喋る刀であった。

銀時は源外に呼ばれて工場に向かい、装置の実験体となった。

そして、飛ばされたのは『リリカルなのは』の世界だった！

銀時は魔法少女と出会い、事件に巻き込まれていく。

新八と神楽が無印編では出てきません。すみません……被らない様にしたらこうなりました。後、新八はロリコンアニメオタクにするつもりなので

僕が書いているもう一つの銀魂の二次小説『銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜』のオリキャラ達が出てきます

第一訓：始まりは突然に（前書き）

ナナフシ「どうも！ナナフシです！」

銀時「こいつが書くなんてな」

ナナフシ「悪いか！後、黒龍さんに一言……銀龍の件ありがとう」「
ざいます！」

銀時「考えてくれたもんな」

ナナフシ「もう俺マジで感謝感謝です！」

銀時「その内銀八先生をやるつもりだからよろしく！」

ナナフシ「それでは『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の
刀』始まります！」

第一訓：始まりは突然に

ここは江戸の歌舞伎町。ここに万事屋銀ちゃんと言う何でも屋がある。

中では銀髪で天然パーマの男、坂田銀時。この物語の主人公である。他には……て、あれ？居ないんですけど。

「ああ、新八はお通のライブ、神楽は定春の散歩だ」
え？マジで？

「マジだ」

銀時は地の文と会話をしていた。
プルル、プルル。

すると、電話が鳴った。

銀時が電話を見てダルそうに取る。

「ハアイ、万事屋でえす」

銀時が怠そうに言った。

『銀の字か？』

「んだ。じーさんじゃねえか」

電話の相手は江戸随一の機械師からくり、平賀源外からであった。

『依頼なんじゃが』

「何だよ」

銀時は訪ねた。

『新しい発明品を開発したから来てくれ』

「絶対ロクな発明品じゃねえだろ。それに実験体にされるのがオチだ。断る」

『そんな事言っただけなのか？』

「あ？」

『来ないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え』

銀時はそれを聞いて行かざるを得なかった。

「行くか……」

『主よ……ちゃんと払わなければならぬではないか』

「銀龍ぎんりゅうの言う通りです」

銀時は誰も無いのに、手に突然刀が現れてそれと話していた。

銀龍は白かった。柄から鞘まで白かった。鍔は白銀だった。

刀身は見せてないが、刀身も白銀である。

銀龍はまた姿を消した。

銀龍は普段は見えないのだ。銀時の任意、ピンチの時に姿を現す。

そのまま銀時は工場へ向かった。

*

「おい、じーさん」

銀時が工場の中に声を掛けた。

「来たか銀の字」

工場の中から老人が一人出てきた。

平賀源外である。

「ん？銀の字。あいつ等はどうした？」

源外は新八と神楽が居ない事を聞いた。

「二人共野暮用」

銀時はそう言った。

「まあ、良い。中に入れ」

源外に言われて銀時は工場の中に入った。

「おお〜！」

中に入った銀時は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん、何だよこいつア？」

「こいつはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」

「ジジイイイイ！また欠陥品作りやがってええええええ！」

『主！落ち着いてください！』

銀時が源外に向かって怒鳴って、銀龍が慰めている時だった。

バチツと言う音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開けると銀時の姿はなかった。

「…厄介な事にならなきゃ良いんだが」

源外は一人になった工場で呟いた。

*

「ん？」

銀時は目を覚ました。

上半身を起こして、周りを見回した。

どこかのコンクリートで出来た道で、周りはコンクリートで出来た壁がある。そして空は暗く、月が出ていた。

「どっ、どこ？」

銀時はそう呟いた。

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（前書き）

ナナフシ「次回から銀八先生コーナーを始めたいと思います！」

銀時「いきなりだな！」

ナナフシ「いや、今回リリカルなのはキャラ出るからさ」

銀時「それでつて……」

ナナフシ「今回は銀龍が使われる！」

銀時「ネタバレ！」

ミラクル「ナナフシはそう言う人だし……てか、何故ミラクル

（エイト）！」

ナナフシ「ミラクル」と神楽は前書きと後書きに出してるんだよ。

無印編出番ないから」

銀時「だってよ。神楽、ミラクル」

ミラクル「いや、銀さんまで！」

神楽「ミラクルの理由が知りたかったら、『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の質問コーナー、もしくは霜月サヤの『妖と夜叉』を見る
と理由がわかるネ」

ミラクル「僕は新八じゃあああああ！」

銀時・ナナフシ「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の

刀』始まるぜ！」

ミラクル「無視するなアアアアア！」

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり

「だアアアアアア！チクシヨー！あのクソジジイのせいで何か良くわからねえ場所に飛ばされちまったじゃねえか！あのクソジジイ！！帰ったら絶対瞬間移動させてやるからなア！」

目が覚めた銀時は怒りを露わにしながら怒鳴っていた。

『主よ。落ち着いてくれ』

銀龍ぎんりゅうが銀時を慰める。

今怒鳴っていても仕方がないと言って銀時を慰めた。

『それに主よ。周りを見る限り江戸ではない事は確かだ』

銀龍の言葉を聞いて銀時は……。

「ああ！ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラする！あんなに綺麗なのにイイ！」

銀時は顔を上に向けて怒鳴る。

銀時がそう怒鳴っている時だった。

ドカーン！

「!?!」

爆発音らしきものが聞こえた。

『主！行ってみましょう！』

「言われなくてもわかってらア！」

銀時は腰に挿してある『洞爺湖』を握りしめながら轟音の方に向かった。

*

銀時が聞いた轟音の発信源は動物病院であった。

そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ美少女 -

・・・高町なのはがフェレットを抱えていた。
そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まって、黒い何かがかもがいている。

ブヨブヨと形を変えて少し気持ち悪さを覚える。

なのはは慌ててフェレットを抱えて逃げ出した。

なのはは学校帰りに酷い怪我をしたフェレットを拾い、動物病院で手当をもらった。

そして夜、頭の中に謎の音が聞こえて、気になったなのはは動物病院に来た。

そして今の状態になっているのだ。

私、高町なのははフェレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げています。

あの怪物にも驚いたけど、フェレットさんが喋った事にも正直驚いています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

「あの、お礼は必ずします！ だから僕にあなたの力を……！」

「お礼とかそんな事言ってる場合じゃないでしょ」

フェレットさんがさっき私に力があるって言ったけど、正直私にそんな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力があるなら。。。

「ぐおおおおおおお！！」

私が逃げながらそう考えていると、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

「っ!!!」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。

でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思った私はゆっくりと目を開けた。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持った男の人が立っていました。

なのはがピンチになったその時に銀時がなのはの前に立ち、木刀で怪物を抑えたのだ。

銀時はそのまま怪物をぶっ飛ばした。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時はまたメンドーな事に首を突っ込んでしまったと思い、メンドくさそうに頭を搔く。

そして、後ろに居るのはに顔を向ける。

「っで、大丈夫かお前？」

「え！は、はい！ありがとうございます！」

なのはは俺を言っで頭を下げる。

「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げた。

「イタチが喋った！」

銀時はフェレットが喋った事に驚いていた。

「あの、フェレットなんですけど」

「イタチもフェレットも変わらねえだろ」

「いや、変わりますよ！」

銀時とフェレットが言い合いをしていると……。

「グオオオオオオ！」

銀時にぶっ飛ばされた怪物は怒っている様だった。

「改めて見ると気持ち悪いなコイツ」

銀時は怪物を見ていつもの様なダラけた口調で答えた。

まあ、この人、エイリアンとか、人に寄生する刀とかと戦ってますしね。

銀時は横目で怪物を見ながらなのはに話し掛ける。

「えつと、お前等名前は？」

「え？た……高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

なのはとユーノは戸惑いながらも自己紹介した。

「じゃあ、なのはとユーノ、お前等はそこに居るよ」

銀時は軽く手を振るうと怪物の元へ向かう。

「えっ！？ちよつと待ってください！危ないですよ！」

ユーノは必死に叫んで銀時を止めようとした。

ユーノは銀時が木刀で怪物を吹き飛ばしたのを見ていた。

だが、アレは『ジユエルシード』と言う『ロストロギア』思念体。

魔法も使えない銀時がどうにか出来る相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているのは同様『リンカーコア』があり、しかもなのはより高い魔力量を有しているのがわかる。

だが、なのは同様魔法の力に目覚めていない事をわかっている。

銀時は魔法なしの肉弾戦戦わなければならない。

それは無謀と言いようがない。

だが、ユーノは後々驚かされる。

ズバババババ！

銀時はユーノの予想を遙かに上回っていた。

銀時が思念体に近づいた時襲ってきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り、思念体をバラバラにした。

「す……すごい！」

「なんて強さだ」

なのはとユーノは銀時の強さに驚いていた。

バラバラになった怪物の破片は飛び散り、壁や電柱を破壊する。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

「はい、終了オ」

銀時は思念体を倒したと思い、腰に木刀を挿し、なのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじょじょに集まっていき、さっきの丸いブヨブヨの怪物に戻った。

「グオオオオオオオ！」

怪物は雄叫びを上げて銀時に襲いかかる。

「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時は後ろを振り向く。油断していた事もあり、銀時は木刀の刀身で防ごうとした。

『我が主よ……油断してはダメではないか』

銀龍がそう言っ姿を現して、銀時に銀色のオーラを纏う。よく見るとこれは魔力である。

その纏ったオーラはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧と言う。

オーラそのものがバリアジャケットの強度を持ち、AAランクの攻撃を喰らっても平気になる。

更にはそれを纏っている時の銀時は身体能力が上がる。

何とかそれで怪物からの攻撃を防いだ。

そのままシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧は消えた。

ユーノはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧に驚いていた。

（い、今のは魔力で出来ていた！何であの人が魔力を使えるんだ！？）

ユーノはそれだけではなく、銀龍にも驚いた。

（そ、それに刀が喋ってる！）

ユーノはデバイスかと思ったが、デバイスではない事は確かである。
そしてなのはは……。

「か……刀が喋ってる！」

銀龍に驚いていた。

それと同時に白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧の綺麗さに見惚れていた。

「あ？こいつか？不思議だよな……喋ってたから……」

銀時も始めての時は驚いていたらしい。
でも今では慣れている。

銀時は怪物に目を戻した。

「ぐおおおお！」

まだ動いている。

鞘から銀龍を抜いた。

そして銀時は銀龍を振り上げた。

「オラア！」

そして振り下ろした。

すると銀色の斬撃が放たれた。

それも魔力で出来ていた。

これを魔力操作マジックコントロールと言う。

銀時の戦闘スタイルに合わせた魔法攻撃が出来る様になる。

つまり、自分の考えた魔力攻撃が可能になる。

（魔力の斬撃まで……一体何者なんだこの人！？）

ユーノは驚きの連発であった。

そして斬撃が怪物に直撃して真っ二つに斬れた。

だが、やはり元に戻ってしまう。

「ちっ、こいつ不死身か……」

『厄介ですね』

銀龍も色んな攻撃方法があるが全て無駄だと踏んだ。

「どうすれば良いの!？」

「いけない!あれを何とか『封印』しなければいけないんだ!」

「その封印ってどうすれば良いの?」

なのはとユーノが封印の事について話しているのに気付き、銀時は銀龍でバラバラに斬つたり、魔力攻撃を行つたりして時間を稼いだ。「さつき言つた事は覚えてる？」

「魔法の事？」

「そう、それを使うにはさつき渡した宝石が必要なんだ」

「これの事？」

なのははさつきユーノから貰つた赤い綺麗な宝石を見せた。

「それで、それを手に、目を閉じ……心を澄ませて……僕の言つた通りに繰り返して……」

なのはは目を閉じてユーノが言つた言葉を繰り返す。

「我……使命を受けし者なり……」

「我……使命を受けし者なり……」

「『契約の元、その力を解き放て』」

「『えと、契約の元その力を解き放て』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『そして、不屈の心は……』」

「『そして、不屈の心は……』」

『『『この胸に！！』』』

なのはとユーノの声が重なる。

『『この手に魔法を……レイジングハート！セーットアップ！』』』
するとなのはの体が光に包まれていく。

<Stand by ready, set up!>
「うわっ！眩し！」

あまりの光に銀時が目を細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着ており、手にレイジングハートを持って浮かんでいるのが居た。銀時はその姿を見て啞然した。

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

「よくわかんないけど……どうすれば良いの？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

そう言われてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだった。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらユーノは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

<Sealing Mode. Setup>

なのはの魔力系が敵を縛り上げ、怪物の額に『???』の文字が浮かび上がる。

<Stand by ready>

「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル????、封印

！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ!? 恥ずくない!」

『主よ……あの子も恥ずかしいのだぞ』

場の空気を壊すようなセリフを言った。銀龍はなのはも恥ずかしがつていると言った。なのは恥ずかしがつているのは本当だ。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

<sealing>

そして、なのはの魔力糸が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近づけるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。

そしてバタリとユーノが気を失って地面に倒れた。

「フェレットさん大丈夫!？」

なのはは気絶したユーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。

さっきのユーノだって自己紹介したって言うに……。

「な、なあ」

「ふえっ!? な、なんですか?」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

「いや、ここにいると不味くね?」

「えっ?」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり没落したりなどかなり酷い状況だった。

更に、

ピーポーピーポーピーポー！

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

『主よ。このままだとどっからどうみても我等がやった様にしか見えぬぞ』

銀龍の言った言葉を聞いて銀時は……。

「に、逃げろオオオオオオオ！」

「ご、ごめんなさー！ーい！」

銀時となのははその場からすぐ離れる為に全力疾走した。

『我は戻るか』

銀龍は呑気に言っつて姿を消した。

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（後書き）

ナナフシ「銀龍も活躍うううう！」

銀時「そうだな」

銀龍『我は出番が少なくとも多くとも構わん』

ナナフシ「だろうな」

ミラクル（エイト）「いい加減名前を戻せええええええ！」

なのは「新八さん、落ち着いてください」

銀時「なのは、違うぞ。そいつはミラクルだ」

なのは「わ、わかりました」

ミラクル「何吹きこんでんだアアアアアア！」

神楽「それではまたアル！次回から教えて銀八先生コーナー始める

アル！質問があれば送ってきてほしいネ！」

第三訓：謎の組織にはご用心

銀時となのは、ユーノが走り去る所を見ていた人物が居た。

「ククク、面白い力じゃねえか」

それを見ていたのは、天然パーマの男で、背中には薙刀を背負っている。

「それにしても銀の兄貴もここに迷い込んだとはな」

男はそう呟いた。

「銀の兄貴と銀龍（銀龍）のコンビは相変わらずだなア……ククク」

男は楽しみに満ちた笑顔だった。

男がそうやってしていると……。

「雷雅（雷雅）ここ居たの」

後ろからロングヘアの女がやって来た。

男の名前は雷雅と言うらしい。

「おう、忍か」

雷雅は女の事を忍と呼んだ。

「探したのよ。アンタは私達『雷撃』のリーダーなんだからね」

忍は雷雅に向かってそう言った。

「わかってるよ。今さっき面白いもんを見ていたんでな」

「面白いもの？」

雷雅の言葉に忍は首を傾げて聞いた。

「銀の兄貴が来ている」

「『白夜叉』が！」

忍は雷雅の言った言葉に驚いていた。

「どうやら俺等と同じ様に迷い込んだのかもしれないな」

雷雅は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「で、どうするの？」

「ちよっくら挨拶してくるわ。攘夷戦争で『迅雷』と恐れられたこ

の俺……疾風雷雅（疾風雷雅）がな」

雷雅はそう言うと言った姿を消した。
実は凄く速いスピードで移動したのだ。
「まったく……先に戻ってよ」
忍も姿を消したのであった。

*

銀時達三人はその後公園に居た。

『とりあえず自己紹介から始めるか』

「そうだな」

銀龍が言った事に頷いた三人。

銀龍も自己紹介と言う事で姿を現した。

「俺の名前は坂田銀時。頼まれれば何でもやる万事屋つてのをやってんだ。後、銀ちゃんでも銀さんでもテメエ等の好きな様に呼んでくれ」

『我は主の相棒である。銀龍だ』

「私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

それぞれ自己紹介を終わらせた後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

ユーノからそれを聞き終わった後、銀時も自分の事情を話した。

ユーノは銀時の話を聞いて『次元漂流者』だと言った。

「『次元漂流者』？」

銀時はもちろん、なのはもわからなかった。

「簡単に言えば迷子ですよ。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人の事です」

銀時はそれを聞いて、

「マジでか？」

確かに辺りを見回す限り江戸ではない。

それに天人さえもいなかった。

銀時はそれを信じるしかなかった。

「で、僕からも聞きたいんですが」

「何だ？」

ユーノは銀時に聞いた。

「その銀龍は一体なんなんですか？」

「あ、それは私も気になります」

ユーノとなのはは銀龍が気になる様だ。

「コイツか？……」

銀時は黙り込んだ。

そして……。

「何だろうな」

ズーン！

銀時が言った言葉に二人はズッコけた。

「何で持ち主であるあなたが知らないんですか！？」

「いや、俺もよく知らないんだよねエ。たまたま見つけて使ってる

？的な」

「いや、何ですかその理由！？」

銀時が言う事にユーノはツツコンでいた。

『主が我を見つけたのは幼少の頃だ。これ以上は言えん』

銀龍はそれだけを言った。

「まあ、わかりました。後一つだけ良いですか？」

『なんだ？』

「あなたはデバイスでもないのに何故魔法を使えるんですか？」

ユーノの言葉を聞いた銀時は……。

「え！？あれ魔法だったの！？」

「今まで知らなかったんですか！？」

銀時は攘夷戦争でも使っていたが魔法だとは思っていなかったらしい。

たぶん銀時は「不思議な能力が使える刀」とでも思っていたのだろう。

ユーノは銀時が魔法に気付いていなかった事に驚いた。

「いや、て言うか。俺の世界で魔法は架空の産物だから」

まさか自分が普通に魔法を使っていたとは思ってもよらなかった銀時だった。

そして視線を銀龍に戻す。

『我か……確かにデバイスとやらではない……我は目覚めた時には主に拾われていたのだ』

どうやら銀龍も何故銀時の魔力を解放する事が出来るのかわからならしい。

『我は何処で作られ、何処で何をしたか、何故この能力を持っており、使い方、名前しか覚えていないのかは謎なのだ』

つまりは記憶には能力と使い方、名前しか覚えていなかったらしい。

『だが、主は我が何者であろうと拾ってくれたのだ』
銀龍はそれ以来銀時と一緒に居る様だ。

「ま、コイツも自分自身がよくわからねえんだよ」

銀時がそう言っているとユーノは「そうですか」と言っ引いた。

「でも、凄いですよね」

なのは目を輝かせながら銀龍を見ていた。
すると……、

「楽しそうじゃねえか……俺も混ぜてくれよ」
いきなり男の声が聞こえた。

その声が出た方向を見ると……雷雅が居た。

「雷雅！」

「よオ、銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。
ゾワッ。

なのはとユーノは恐怖を感じた。

雷雅の目は戦いたいと言う目だった。

「デメエ……何でこの世界にいやがる！」

銀時は敵意を剥き出しにして言った。

なのはとユーノは敵意剥き出しの銀時にも驚いた。

「何……俺も銀の兄貴と似た理由でこの世界に来たんだよ」

雷雅は銀時にそう言った。

「デメエも！」

「ああ、俺達の組織のバカ機械師からくりのせいでこの世界に飛ばされたんだよ」

「俺達？と言う事は『雷撃』の奴らも！」

「ああ、居るさ」

雷雅は「ククク」と笑いながら言った。

「まあ、今回は挨拶に来ただけだ……今度会う時が楽しみだな……
アハハハハ！」

雷雅は笑って去っていった。

「銀さん……あの誰ですか？」

「強者を求める戦闘狂野郎だよ」

銀時はそれだけを言った。

「でだ……その話は置いてこうぜ」

銀時はこれ以上聞かれないうちに言った。

「思えば銀さんって行く当てがないんですよ？」

「ん？ああそうだな」

銀時はなのはの言った言葉に頷いた。

「なら、家に来ませんか？」

「え？」

銀時はなのはの言葉に驚いた。

「助けて貰ったお礼もしたいですし。それに銀さんと銀龍さんとも
もつとお話したいのでノノノ」

なのはは頬を赤らめながら言った。

銀時がなのはを助けた時、銀時が格好良く見えたのであろう。

「マジで良いのか？お前の家族が何て言うかわからないぞ」

『そつだぞ。主は大丈夫だが、見ず知らずの男を家に入れるのはどうかと思つぞ』

銀時と銀龍はそう答えた。

「大丈夫です。私を助けてくれた人つて説明すれば、お母さん達は銀さんを泊めるのを許してくれると思います」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

銀時はそう言つた後、「あ、後」と言つた。

「その『ジュエルミート』集め俺も手伝うぜ」

「銀さん『ジュエルシード』だよ」

銀時の間違いをなのが訂正した。

「居候させて貰う代わりに手伝つてやるよ。俺は万事屋だからな」

銀時がそう言つた。

「でも……」

ユ一ノは渋つていた。

「十歳を満たない女の子がそれを集めるのは危ないだろ。だから俺も手伝つてやるんだよ」

『我もその意見には賛成だな』

銀龍は銀時の意見に賛成した。

「わ、わかりました」

ユ一ノは銀時と銀龍との言い合いでは勝てないと思つたのだ。

銀時はこうしてなのはの家に居候する事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、それでは銀八先生コーナーを始めます。アシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「はい、その内魔王になる高町なのはがアシスタントだ」

なのは「なりません！」

銀八「早速質問行くけど、一つしか来てないんだよね」

なのは「そうなんですか？」

銀八「ああ、と言う訳で始めるぞペンネーム『月光閃火』さんから
の質問

『ども…月光閃火げっこうせんかという。

しかし…タグにもあったが、また新八をそう扱うか…(黒)。(そう
言いながら、黒いオーラを放ちつつ右掌から紫焰を立ち上らせる
(汗)

輝刃「…閃火…とりあえず落ち着こう…(汗)。あ…さっそくだが
質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・銀龍に質問…銀龍って話にもあった通り『喋る刀』だが、やはり
人間の姿にもなれるのか？

あゝ…確かに、そういうタイプの武器って大概何かしらの人化設定はありそうだもんな…。次は俺からだ。

2. ナナフシさんに質問…というか忠告ね？タグにもあった通り、『新八はロリコン』なんてあったけど…あんまり酷い扱いはしないですよ？（黒笑み& a m p ;紫焰メラメラ（汗））

輝刃「…とりあえず、加減はしとけよ（汗）？俺も種族上言えた義理では無いが…（汗）。「…」」
月光閃火の言葉に黙り込んでいた。

銀八「まずは一つ目だが」

銀龍『我か？我は人の姿になる事は無理なのだ』

銀八「だそうです。二つ目の質問の答えをナナフシ」

ナナフシ「き…気を付けないと…」

ナナフシはガクガクとなっていた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。あまり脅したらダメだぞ」

なのは「質問は以上です」

銀八「それではまた次回」

第四訓：化け犬には気を付けよう（前書き）

ナナフシ「ミラクル が広まると良いなあ」

ミラクル 「いい加減にしろオオオオオオオ！」

ミラクル が木刀で襲いかかってきた。

ナナフシ「うゝん、これくらいなら大丈夫だよね！ロケラン！
ドカーン！」

ミラクル は黒こげになった。

銀時「『月光閃火』に殺されてもしらねえぞ」

ナナフシ「……やりすぎたか？」

銀龍「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まるぞ」

第四訓：化け犬には気を付けよう

なのは朝目覚めてユーノに挨拶をしてから、リビングに向かった。いつもより、騒がしい声が聞こえる。

何故なら……。

「おはようございます。銀さん」

「おう、おはよう」

銀時が居候仕始めたからだ。

銀龍は姿を消しているので気付かれていない。

銀時が居候した事により騒がしくなったのだ。

朝ご飯では……。

「てつめ、離しやがれ！これは俺のウィンナーだ！俺はコイツを生まれる前から目をつけてたんだぞ！」

「ふざけるな！お前こそ離せ！」

「銀さん！お兄ちゃん喧嘩しないで！」

銀時と恭也はウィンナーを箸で引っ張り合う。

そして喧嘩する二人を宥めようとするなのは。

こんな風に騒がしくなったのだ。

*

なのは学校でユーノと念話をしていた。

ユーノは魔力が回復したらこのまま自分一人でジュエルシード探しすると言ったが、なのはも手伝うと言った。

ユーノは渋ったのだが、なのはは魔法が自分のやりたい事かもしれないと言いながら、ユーノを説得する。

その上で銀時ものりくらりとユーノを説得し、最終的にはユーノ

は折れた。
そしてこれからはなのはと銀時がジュエルシード探しを手伝うことになった。

*

なのはは放課後に町の神社に来ていた。ユーノも一緒である。

ジュエルシードの反応があったからだ。

そしてそこにはジュエルシードを取り込み、子犬から巨大な犬に変わった怪物がいた。

たまたま飼い主と散歩をしていた犬が落ちていたジュエルシードを取り込んでしまったのだ。

体は鎧のような黒く堅そうな皮膚で覆われ、目は四つになり、鋭そうなたをむき出していた。

「気をつけてなのは！ 現住生物を取り込んでいる！」

「どうなるの？」

「実態がある分、強い」

ユーノ目を細くしながら化け物になった犬を見ている。

これからは化け犬と呼ぼう。

「なのは！ レイジングハートの起動を！」

「起動つてどうやるんだっけ！？」

「えっ……！？」

なのはの言葉を聞いてユーノは呆けた声を出してしまう。

なのはが起動の仕方を忘れてしまったとは思っていなかったからだ。

ユーノはなのはの肩に乗って言う。

「ほら、“我使命受けし者”からの起動パスワードだよ！」

「あんな長い覚えてないよ！」

なのはとユーノがもたついてしていると、化け犬が唸り声を上げてなの

はに向かつて駆け出す。

「じゃあもつかい言うから僕の言う言葉を繰り返して！」

「わ、分かったの！」

ユーノとなのははレイジングハートの起動に注意がいつていたので気が付かなかつたが、化け犬は二人のすぐ前まで来ていた。

ユーノは化け犬が近づいて来ている事に気づき声を上げる。

「危ない！！！」

「えっ！？」

ユーノはなのははに声を掛けてなのはが反応する時には既に間に合わず、化け犬はなのははに襲い掛かる直前だった。

なのははダメだと思い目を瞑った時……

ドカア！

「グワアッ！」

と何かがぶつかる音がした。

なのはははゆっくりと目を開けると、化け犬は自分の目の前から離れた所で呻きながら倒れ、自分の目の前には木刀を構えた銀時の背中があった。

「銀さん……」

なのははつい銀時の名前を呟いてしまった。

銀時はなのはの言葉を聞いて振り返る。

「おいおい、随分メンドーな事になつてんじゃないか」

銀時は愚痴を零しながら化け犬を横目で見る。

化け犬は銀時の攻撃が思った以上に重いらしく、まだ立ち上がれずふらついていた。

「あの、どうして此処に？」

ユーノは慌てていたので銀時を呼ばずに来たのだ。

だから銀時がここに居る事を疑問に思った。

「ジャンプ探してたらたまたまお前達が神社に行くのが見えたんで

な」

「ジャンプ？」

『まあ、主の言った事は忘れてくれ』

ユーノが聞き慣れない言葉に首を傾げていると銀龍がそう言った。

銀時がジャンプを探していて、なかなか見つからず、探していた途中でなのはとユーノが神社に入っていくのが見えたので銀時は後を追って今の場面に遭遇している。

銀時がそう説明し終わると……。

「グルルルル！」

化け犬が怒りの形相で銀時をにらみつけていた。

どうやら銀時に木刀でぶつ飛ばされたのが頭に来た様だ。

「おいおい。それにしても何だよアレ？ あの変なブヨブヨの化け物といい、コイツと良い、ジュエルシードってのはモンスター製造機ですかコノヤロー」

銀時がダルそうに化け犬を見ながら愚痴を零した。

「気をつけてください！ 昨日と思念体と違って現住生物を取り込んでいるから強くなっているはずです！」

ユーノがさつきなのはに言った忠告を銀時に言うが、銀時は「はいはい」と軽い返事をした後、木刀を肩に掛けながら化け犬に近づく。それを見たユーノは慌てて銀時に声を掛ける。

「ちよっ！だから危ないですってば！」

ユーノも昨晩の戦いで銀時が思念体を圧倒していたのは知っていたが、今回の相手は現住生物を取り込み昨晩の思念体よりも強い。

銀時が銀龍のおかげで魔法を使えるのは知っているが、銀龍を出さずに向かっている。

魔法なしで銀時が肉弾戦で戦えるとは思わなかったからだ。

だが、ユーノの考えはすぐに覆された。

近づいて来た銀時を化け犬がここぞとばかりに爪で引き裂こうとするが、銀時はそれを簡単に木刀でいなしていく。

上からこようが、下からこようが、斜めからこようが全ての攻撃を

完璧に防御していた。

(す、凄い……!!)

ユ一ノは目を見開いて驚いていた。肉弾戦だけではどうやったって限界があると思っていたが、自分の考えがまったく意味をなさない事を銀時の戦いを見て思い知った。確かに今の戦いの様子は銀時が押されているように見えるが、それはまったくの逆。

銀時が最小限の動きで化け犬の攻撃を防いでいたのだ。そして攻撃した手が木刀で弾かれた事でスキができた。すかさず銀時が反撃の態勢に入った。

「おいたいも大概にイ！」

銀時は木刀を振り上げ飛び上がる。

「しやがれエエエエエ!!！」

ズドン!!

重い一撃が化け犬の脳天にクリーンヒットした。

ドサツ!

化け犬は声も上げずに白目を剥いてゆっくり倒れた。

「はい終了」

銀時は腰に木刀を挿す。

「や、やったアアア!!！」

なのはは銀時の勝利を見て喜び飛び上がった。

銀時が勝った事をつい自分のように喜ぶところは子供らしいと言え

るだろう。

『ユーノよ。主を甘く見てはいけないぞ』

「は、はい」

（僕は……彼の事を侮っていたのかもしれないな……）
ユーノはユーノで、思い返していた。

魔法の才能があるのはにはこれから手伝ってもらおうと思っていたが、やはり銀時には極力手伝ってもらわないようにしようと思っていた。

それはユーノが純粹に銀時の事を気遣っていたからだ。

いくら腕に覚えがあっても魔法がなければ何もできない。さっきまでそう思っていた。

だが……銀時の戦いを見てその考えを改めた。

そして帰ったら改めて銀時にジユエルシード集めを手伝ってもらおうと思った。

「おい。倒したは良いんだけどよ、この後どうすんの？」

銀時は二人に歩いて近寄りながら聞く。

なのはとユーノも“あっ”と思出し、ユーノがなのはに言う。

「なのは。さっきも言ったとおり、僕に続いて起動パスワードを言
つて」

「うん」

なのははユーノ言葉に頷き、レイジングハートを握り締める。

（銀さんがあれだけ頑張ったんだから、私も……！）

銀さんの役に立ちたい。

そんななのはの思いに反応したのか、レイジングハートが強く光を
発した。

<Standby Lady Setup>

「えっ……？ レイジング、ハート？」

「これは……！」

レイジングハートから女性の声が聞こえ、なのはとユーノは驚いて

いた。

そして光が収まると杖の姿になったレイジングハート持ったなのは姿があつた。

「これって……」

なのはレイジングハートを見て呆然としてしまった。

「まさか起動パスワードなしで起動させたなんて……」

「なんだ？ 何かおかしい事でもあんのか？」

ユーノは今更ながらなのはの才能に驚いていた。

やはりなのはは自分よりも遥かに魔法の才能があると実感した。

銀時は二人の様子から何か問題があるのかと思ひ首を傾げる。

『主よ。聞くからにはパスワードがいるらしいのだ』

「なるほど。それなしで発動したからか」

銀時は銀龍の言つた事を聞いて理解した。

「なのは。次に防護服を」

「うん。レイジングハート、お願い」

<Barrier jacket>

そしてまた桃色の光になのはが包まれる。

そして光が収まると、白いリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

(あ、あの服のデザインってさっきの服だったんだな)

銀時はなのはのリアジャケットがなのはの聖祥小学校の制服に似ていると気づく。

結構どうでも良い事に気づいた銀時なのであつた。

そしてその後、昨晚の思念体同様、桃色の紐で気絶している化け犬を縛り封印する。

なのはがジュエルシードを封印する横で、銀時とユーノは話をしていた。

「何で銀さんは銀龍を使わないんですか？ 自分にもリンカーコアがあるのはわかるでしょ」

「え？ そうなの？」

銀時はユーノの言葉に驚いていた。

「でなければ使えていませんよ」

「そうなのか……俺はてっきり銀龍が持っているのかと思ってた」ズテン！

ユーノは銀時の言葉にすっ転んでしまった。

『主の魔力を使って我は初めて魔法を使えるのだ』

「そうだったのか」

銀時は納得がいった様だ。

「で、話を元に戻しますけど」

「銀龍を使わない理由か？今はこいつだけでことが足りてんだよ」

銀時は木刀を握った。

「ま、たまに使うかもな」

銀時はそう言った。

「そうですね」

ユーノはそれを聞いて引いた。

銀龍の存在がドンドン気になりだしたユーノだった。

何故デバイスでもないのに持ち主の魔力を解き放てるのか……。

それが謎だった。

なのはが封印を終えたので、帰った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

なのは「最低だと思っています」

銀八「こつちのなのはに嫌われてやんの。三つ目」

ナナフシ「僕はあんまりクロノは嫌いじゃありませんよ。時空管理局は……大きな組織には裏があるからあんまり好かないな……寧ろ、他の人の作品を見るとクソと思うから」

銀八「すんごい言いようだな……」と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい」

銀龍『最後の質問だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ』
『質問です』

この物語での無印編では銀時の味方キャラやフェイトの味方をしてくれる銀魂キャラはいないんですか？』だそうだぞ」

銀八「これネタバレにならないか？まあ、今の所はありません。雷雅達が支配者さんの所と言うジユド達みたいな感じですね……つまりは裏で糸を引いているような……銀時は見ていけばわかると思いますと言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

銀龍『それではまた』

第四訓：化け犬には気を付けよう（後書き）

ナナフシ「もう……黒龍さんの所パクった様にしか見えない」

銀時「おいおい」

ナナフシ「とりあえず、次回はね……大丈夫かな……」

銀龍「それではまた次回」

第五訓：間違いは誰にでもある（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「良いじゃん別に……………それに早くフェイト出さないと…
…」

銀時「思えばまだだったな」

ナナフシ「いや……………向こうに銀魂キャラ居ないからさ……………」

銀時「おいおい」

ナナフシ「砲撃が来る前に出さないと……………」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第五訓：間違いは誰にでもある

銀時ははなのはの父親である土郎が監督を務める翠屋JFCのサッカーの試合を成り行きで見っていた。まあ銀時はつまらなそうにしていたが。

アリサとすずかとはその時に挨拶をした。

銀時はその時思った。

アリサと神楽の声と同じだと気付いたのだ。

銀時が居る理由はなのはに誘われたからである。

銀時はメンドくさがっていたがなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（上目遣い+涙目）で頼まれて渋々ついてきたのだ。それで今に至ると言う訳である。

*

そしてその夜、なのはと銀時、ユーノはビルの屋上に立っていた。ちょうど暴走したジュエルシードを封印したところである。

なのはとユーノ後ろには銀時が立っている。

なのはは、今とても後悔していた。

なぜならジュエルシードの気配に気づいていたのにそれ勘違いだと思ってしまったからである。

今町はジェルシードの暴走ので発生した被害で酷い有り様になって

いる。

「ごめんユーノくん私・・・ジェルシードの気配に気づいていたのに、それを勘違いだと思ってた」

なのはは、今にも泣きそうだった。

「なのは・・・」

ユーノはどんなのはに言葉を掛けて良いか分らないでいた。すると……。

「よぉ、なのは」

銀時はいつものダルそうな声でなのはに声を掛けた。

「・・・銀さん」

なのはは、泣きそうな顔で俯いていた。

こんな失敗をして、銀時の顔をまともに見れないでいた。

「別におまえが気に病む必要はねえ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

『そうだぞ。なのはよ』

「銀さん、銀龍さん・・・でも、これは全部私のせいで・・・」

なのはは、まだ俯いて辛そうにしていた。

場の空気がさらに重くなった感じがした。

「はぁー」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いた。

なのはは、こんな事になったのは自分のせいだと言う考えが頭の中を巡っていた。

長い沈黙が続いた。

「いい加減にしろやアアアアアアアアアア!!」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、なのはの頭に拳骨を食らわせた。

「ッ!!!」

なのはは、両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

「ちょッ!? 銀さん、何やってるんですか!!」

ユーノは、なのはないも悪くないのに銀時が怒ったことに声を荒げた
「フェレットもどきは黙ってる!!」

銀時の凄みある言葉にユーノは押し黙った。

「なのは、俺が怒ってんのは別にお前が失敗したからじゃねえ」

銀時は首を横に振る。

「ふえッ!?!」

なのはは涙目になって頭を抑えながら銀時の顔を見る。

「そうやってお前がいつまでも後ろばっか向いているからだ」

「ッ!」

なのはは何かを気づいたような顔をする。

銀時の言う通り今の自分は自分を責めているだけで前を向こうとしていない。

銀時は坦々と語り続ける。

「確かに過去にあつた事は消せやしねえ!。だからと言って、過去の過ちを振り返るなとも言わねえ!」

『主よ……!』

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言う。

その顔がどこか寂しさを漂わせていた。

銀龍は銀時が何を思い出しているのかはわかっていた。

再び銀時はなのはに顔を向ける。

「だからそう言うもんを全部背負って前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい?」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。

そして再び顔を上げる。

「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジュエルシード集めをしようって決めました。けど、今は違います!

こんな失敗を起こさないために、皆を守るためにも、自分の意思でジュエルシード集めを続けます!」

なのはの顔には強い意思が籠っていた。

「そうか」

なのはの答えに満足だったのか銀時は微笑を浮かべながらなのはの頭を撫でる。

「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねえー、他にもお前を心配してくれる奴が、支えてくれる奴がいるんじゃないか？」

銀時はなのはの頭をゆっくりと撫でながら何かを諭すように言う。
「ま、お前がまた立ち止まった時には、いつでも俺がお前の背中を押しやるよ」

そう言っつて銀時はなのはの頭から手を離れた。

「銀さん……」

なのはは銀時に顔を向けた。

『我にも頼つて良いぞ』

銀龍は姿を現してそう言った。

「もう一人で悩むんじゃねえぞ。良いな？」

「はい！」

なのはは嬉しそうに頷く。

「銀さん、銀龍さん、本当にありがとう」

なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言った。

ユーノはなのはの笑顔を見て少し顔を赤くしていた。

まあフェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。

なのはは顔を赤くしながら銀時を見ていた。

銀時はなのはへのフラグを強化したのだった。

*

そして時間は夜になる。

とあるビルの屋上にはそこに二人の人間と一匹の獣がいた。

一人は黒いマントなびかせ黒い斧のような杖を持った金髪の少女。

「ロストロギア……形状は青い宝石、一般名称はジュエルシード」
少女はそう呟いた。

「早く手に入れないと……母さんのためにも」

「ワオオオオオオオン！！！！」

そしてその声に答えるかのように金髪の少女の近くに控えていたオカミが夜の街に遠吠えを響かせた。

そして数瞬、その場にいたはずの一人と一匹の姿が消える。

少女 『フェイト・テスロツサ』は自分の大切な人のために目的の物を集める。

第五訓：間違いは誰にでもある（後書き）

ナナフシ「やっと……フェイト来た……」

銀時「殺されなくてよかったな」

ナナフシ「たぶん、フェイト視点も出てくるかも」

銀時「かもかよ！」

ナナフシ「後……見直したらユーザーのみになってた……これ解除した方が良いかな？」

銀時「好きにすれば？」

ナナフシ「だよね……解除しとくので感想待ってます」

銀龍『それでは次回は主となのはがフェイトと遭遇するぞ！』

第六訓：迅雷ってどれだけ早いのか？

翌日。

銀時ははなのはとなのはの兄の恭也そしてなのはの友達であるアリサと一緒に月村すずかの家に遊びに来ていた。

あ、銀龍は姿を消してるけど。

銀時が何故なのは達と一緒に居るかと言うとまたなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（涙目＋上目遣い）で誘ってきたので、渋々着いてきたのだ。

そして月村邸に来た銀時の第一声が……

「でか!？」

だった。

まあお金持ちの中のお金持ちである月村家の家はめっちゃくちゃでかい。

さすがに一般庶民である銀時にとっては驚かすにはいられなかった。ついでに銀時の服装はいつも通りだが、木刀は竹刀袋に入れている。月村邸を見て呆然している銀時に恭也が声を掛ける

「おい、何しているんだ。置いて行くぞ」

銀時はその言葉を聞いて、なのは達の後を追った。

銀時達は月村邸の庭に来た。

銀時は庭にある椅子に座った後、恭也が美女と一緒にどこかに行くのが見えた。

「ん？ アイツと一緒にいるねーちゃん誰？」

「あつ、あの人はすずかちゃんのお姉さんの月村忍さんです」

「ちなみにあの二人付き合っているのよね」

「マジか？」

そして銀時は……。

『主やめろよ』

銀龍が姿を消したまま銀時の耳元で囁いた。

銀時は大人しくした。

とりあえず恭也の話はここまでにしてなのは達は紅茶を飲んだりお菓子を食べながら楽しそうに話していた。

銀時は話に参加していない。

銀時はこういうのにあまり参加しないのだ。

とりあえず銀時はお菓子食べながらなのは達の話の話を耳を傾ける程度に聞いていた。

（何か詰まんねえ）

銀時がそう思った時だった。

「キユーキユー！」

さっきからネコに追われてたユーノが鳴き声を上げながら銀時の肩まで上った。

「うおッ!？」

突然ユーノが自分の肩に登って来た事に驚いた銀時は少しバランスを崩すがすぐに持ち直す。

そして自分の右肩に乗っているユーノを見ると、さっきから追いかけて来たネコを見下ろしながら少し怯えていた。

（なんつつか、コイツも苦労してんだな）

ちよっとユーノに同情した銀時であった。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

【ユーノ君!】

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

【うん。近くにジュエルシードがあるね】

どうやら二人はジュエルシードの気配を感じ取ったようだ。

ユーノは、銀時の肩から降りて森の中に走っていった。

アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言っつて、なのはは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」
「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」
手を振りながらなのは言う。
なのは達の様子に銀時は気付いた。もしかして二人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。
「じゃあ、俺も行くか」
銀時が頭を掻きながら立った。
銀時はなのはの後を追った。

*

なのは、ユーノ、銀時は森の中でジュエルシードを探していた。
なのはバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持つてる。
「なのは、こちら辺にあるのか？」
「そのハズなんですけど……」
すると大きな足音のような音が聞こえた。
『この足音は？』
銀時達は辺りを見回す。
「アレ！」
ユーノが何かを見つけて前足で見つけたモノを指す。
『！！！！』
ユーノが指したモノを見て皆驚いた。
「にゃ〜」
皆の目の前に大きな大きな猫がいたのだ。
どれくらいでかいかと言うと体長八メートルはありそうなほどだ。
『でかいな』
銀龍は呑気に言った。

「えっと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

「いやア、でかいなア」

銀時は大きな猫を見ながら言った。

後、ユーノが言った事を聞いて思った。

（ああ、ジユエルシードってそんな感じか）

銀時は巨大化した猫を見ながらジユエルシードの力を認識した。

例えて言うならいい加減なドラゴ○ボールだと思った。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』と言う辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ……そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだろうし……」

そうやってなのははレイジングハートを構えた。

銀時は頭を掻きながらやる事を決める。

「よし……帰るか」

『そうだな』

銀時と銀龍はそう言った。

「って待ってくださいよ！」

ユーノは銀時を止めた。

「銀さん何帰ろうとしてんですか！？ 封印するんでしょう封印！」

！手伝ってくれるって言ったじゃないですか！？」

「あん？ あんなでかい奴はウルト○マンに任せとけば良いんだよ」

「ウル○ラマン！？ ウルトラ ンってなんですか！？」

銀時とユーノがそうやって揉めていると、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃ〜〜！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰!？」

全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女　　フェイトが空中にたたずんでいた。

そして、フェイトはなのは達を見る。

(私と同じ魔導士……)

フェイトはなのはを見ながらそう思った。

(でも……母さんのためにも、ジュエルシードは譲れない)
フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

*

「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師!？」
フェイトを見てユーノが驚く。

『と言う事はジュエルシード狙いだな。主よ』

「はいはい、わーったよ」

銀時は竹刀袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュは鎌のような姿の『サイズフォーム』になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは!」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

ガキン!!

「!!!」
だがバルディッシュの刃がなのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の木刀によって止められた。攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「銀さん!!!」

なのははフェイトの攻撃を止めた人物の名前を叫ぶ。

銀時はそのまま木刀を横薙ぎ振る。

「くっ!!」

フェイトは銀時の力に押され後退し、体勢を整えて少し地面に近い辺りで体を浮かせる。

フェイトを後退させた後、銀時は肩に木刀を掛けながらフェイトに言葉を掛ける。

「おいおい、ガキが随分物騒なモン振り回してんじゃねえか」

軽口叩く銀時をフェイトは睨みながら質問する。

「……何者ですか?」

「俺か? 俺は坂田銀時です。趣味は当分撰取。キャプテン志望してまゝす」

銀時はいつものダルそうな声で言った。

「それでお前は? お前も何者なんだよ」

「……」

名乗らなかった。

「おいおい、自己紹介も出来ないのか? 今の世の中なア、自己紹介くらい出来ないと友達も祿に出来ないぞ! って何処かの誰かさんが言っていました!!!」

ズーン!

銀時の最後の言葉にその場に居た全員がズッコケた。

「何処かの誰かさんって誰ですか!?!」

「何処かの誰かさんだよ!」

ユーノは銀時にツツコンだが、銀時の答えは変わらなかった。

「フェイト……フェイト・テスタロッサ」

フェイトは銀時達に名乗った。その後……。

「フェイトー!!」

オレンジ色のいん「狼だ!」狼……アルフがやって来た。

「大丈夫かい!？」

「うん」

フェイトはそう言った後地上にいる銀時となのはを見る。

アルフもつられて銀時達を見る。

「他の魔導師かい？」

「うん」

アルフの問いにフェイトは答えた。

「よし! あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジ

ユエルシードを回収して!」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ? 心配いらなくて」

「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

「マズイ! ジュエルシードを封印するつもりだ! 止めないと!

!」

ユーノが叫んだ後、フェイトを追いかけようとする。

「そうはさせないよ!!」

だがその時空からアルフがユーノに迫る。

「ユーノ君!」

なのはがユーノに向かって走る。

「大丈夫だよ、なのは!」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

それを見て安心したなのはは足を止めて安堵する。

「ちっ!」

舌打ちした後アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは! ジュエルシードを!」

「う……うん!」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言ったろ！」

アルフは素早く動いてなのはの背後に回り襲い掛かる。

「なのは!!！」

ユーノが叫んで、後ろを振り向いてアルフの攻撃に気づいたなのはは咄嗟に目を瞑ってしまふ。

その時。

ガキン！

「お前：！」

アルフは声を上げ、目の前で自分の爪での攻撃を木刀の刀身で防いでいる銀時を睨みつける。

「銀さん!!！」

銀時に助けられたなのはは嬉しそうな顔で銀時の名前を叫ぶ。

「わりいが、そう簡単に傷つけさせねえぜ」

ニヤリと微笑を浮かべてアルフの攻撃を防いでいる銀時。

銀時はそのまま思いつきり木刀を振った。

アルフは後ろに飛ばされ、着地した。

銀時とアルフが対峙していると……

「!!！」

銀時は何かに気付いた様に後ろに飛んだ。

ドスツ！

何かが地面に刺さる音がした。

銀時が立っていた所を見ると薙刀が刺さっていた。

「これは!？」

銀時は驚いた。

この薙刀は……。

「よオ、銀の兄貴」

雷雅の薙刀だった。

雷雅が薙刀がある所に姿を現したのだ。

「あんた誰だい!？」

アルフは雷雅に言った。

雷雅はそれを聞いて振り返った。
ゾクッ。

雷雅の目を見た途端逆らつてはいけないと思った。

「何……お前等の手伝いをされる様に雇われた者よ」

雷雅は不気味な笑みを浮かべた。

「銀の兄貴は俺に任せな」

アルフはそれを聞いて頷いた。

「なのは、ユーノ……ここは俺に任せろ」

「わかりました」

なのはとユーノは一度会った事がある雷雅が危険だとわかっていた。
そのまま銀時と雷雅だけが残った。

「さア……勝負と行こうぜ……銀の兄貴」

「雷雅！」

銀時と雷雅が睨み合い……同時に動いた。

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを右に交わした。

雷雅はそのまま右に薙刀を振った。銀時はそれを木刀で防ぐ。

そのまま銀時は雷雅の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

雷雅はすぐさま態勢を取り直して、銀時を見た。

「銀龍を使う気はねえか」

「当たり前だ」

雷雅の問いに銀時は答えた。

「なら……本気で行く」

雷雅がニヤリと笑うと目の前から姿を消した。

『主！出たぞ！』

「わかつてらア！」

雷雅の異名は『迅雷』……その名の通り、素早いのだ。

素早さで相手を翻弄し、そのままドンドン斬っていくのだ。

銀時は雷雅が何処に行ったか辺りを見回しながら一生懸命探してい

る。

すると……。

ブシュツ!

銀時の体に切れ目が入った。

それが始まりの様にドンドン銀時の体に切れ目が入っていく。

「ククク、銀の兄貴……俺を捕らえられるかな?」

雷雅が銀時にそう言った……と同時に木刀を弾かれた。

木刀は地面に落ちた。

取りに行こうとするが……雷雅が行かせない。

「ちっ!」

「銀の兄貴……得物がないぜ?」

雷雅の姿は見えないがきつと笑っているであろう。

銀時は銀龍を取り出した。

「ククク、銀の兄貴!勝負だ!」

雷雅はまだ連続で銀時に襲いかかる。

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして……。

「オラア!」

雷雅が上に現れて、突きを放った。

銀時はそれに反応して、後ろに飛んで避けた。

「なっ!!!」

雷雅は驚いていた。

自分の攻撃が避けられたのだから。

銀時はそのまま白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧を纏った。

そして、銀龍を鞘にしまった。

「やべえな」

雷雅は態勢をまだ整えていなかった。

「喰らえ」

銀時が一瞬にして雷雅に近づいた。

すると……。

ズバババババババババ！

雷雅の体に斬った後が出来る。

銀時は雷雅に近づいた時に斬撃を浴びせたのだ。つまりは強力な居合い切りを放ったのだ。

「瞬銀……」

銀時はそう呟いた。

雷雅はそのまま地面に倒れたがまた立ち上がった。

『まだ立ち上がれるのか』

銀龍は驚いていた。

「ハアハア……今回はここまでだ……またな」

雷雅は姿を消した。

『主よ。なのはの元へ向かおう』

「おう」

銀時はなのはの元へ走っていった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、今回も質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

ユーノ「アシスタントのユーノ・スクライアです」

銀八「はい、それじゃ張り切って行こうか」

ユーノ「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『1・雷雅（名前…合っているだろうか？（汗）に質問…銀時の『甘党』のように食べ物の好みのこだわりってあるのか？

あ…確かに、それは気になるかも…。桂の兄ちゃんも大の『そば好き』だし。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…というか、この前の質問の続きだ…。第四訓の前書きでやり過ぎたな？（黒笑）…全身煤まみれ決定（そいうって、漆黒笑みを浮かべながら右掌から立ち上らせた紫焰でナナフシの全身を煤まみれにする）

輝刃「あゝあゝだから言わんこつちやない…（呆）。あと、閃火は新八を蔑むような事柄も嫌悪感を抱くからな。」「って作者大丈夫なの!？」

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ぎゃあああああああ!?!?!?!」
ナナフシの断末魔が聞こえた。

ユーノ「……」
ユーノはナナフシを哀れな目で見ていた。

銀八「で、雷雅どうなんだ？」

雷雅「特にねえな。食のこだわりなんて……」

銀八「らしいです。と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

と、黒龍さんの新八に放った。
まあ、こっちでは新八はまだだしね。

銀八「放っちゃったよ！最後は却下で！」
銀八は言うが……聞いてしまったなのはが。

なのは「銀さん……」（涙目＋上目遣い）
で、銀時を見ていた。

銀時「これは……言えない」

銀時はさすがに言えなかった。

銀八「むかつく！と言う訳で『黒龍』！廊下に立っている！」
銀八は黒龍さんに八つ当たりした。

ユーノ「やっと解放された」

ユーノが新八から解放されて帰ってきた。

銀八「次行くぞ」

ユーノ「はい。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。』

銀時へ

『リリカル銀魂 Strikers』攘夷戦争』に関する質問を2
つ。

『質問』

総悟と神楽と銀時とトシに
にじファンでは、神楽と総悟の恋愛小説があります。どう思いますか。』
『それでは指定の四人お願いします』

沖田「誰がチャイナなんかと！」

神楽「それはこっちのセリフアル！」

沖田と神楽は喧嘩を始めた。

銀時「神楽と総一郎君がなア」

沖田「総悟です。旦那」

喧嘩をしながら銀時に間違いを指摘した。

土方「チャイナと総悟がか……ブフツ」

土方は妄想しただけで笑ってしまった。

沖田「覚えとけ、土方コノヤロー!!!」

沖田は青筋を浮かべながら土方に怒鳴った。

銀八「ハイ、と言う訳で『獄黒』さん廊下に立ってなさい」

ユ一ノ「質問は以上です」

銀八「それではまたア」

第六訓：迅雷ってどれだけ早いのか（後書き）

ナナフシ「さすがに長すぎた」

銀時「だろうな」

ナナフシ「雷雅は相変わらず速いねエ」

銀時「それがあいつの戦闘スタイルだからな」

ナナフシ「思った。黒神さんの所のスバルの刹那の瞬間移動と雷雅のスピード……どっちが速いんだろう？」

銀時「さア」

ナナフシ「もし、刹那の瞬間移動が地雷亜並み、もしくはそれ以上だったら雷雅より速いね」

銀時「雷雅は地雷亜の次かよ」

ナナフシ「まあね。それではまた次回！」

瞬銀

シルバー・オブ・アーマー

白銀の鎧を纏い、身体能力が上がった事で使える技

刀を鞘に納め、一瞬にして相手に近づき相手にいくつもの斬撃を浴びせる技。

簡単に言えば、強力な居合い切りである。

第七訓・温泉では心と身を癒そう（前書き）

ナナフシ「今回はまあ……なんて言えば良いんだろうか……」
銀時「おい！」

ナナフシ「とりあえずなのはお願い」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります」

第七訓：温泉では心と身を癒そう

銀時がなのはの所に向かう途中でフェイト達が飛んで行くのが見えた。

銀時がそのまま見ていると、

「銀さん！」

「なのは」

バリアジャケット姿のなのはが飛んでやって来た。

そして銀時の近くに降り立ったなのはは申し訳なさそうな顔で銀時に謝る。

「ごめんなさい銀さん！ ジュエルシードあの子に取られちゃったの！」

なのはは巨大猫の所に付いた時には既に黒い魔導師にジュエルシードを取られていたと銀時に説明した。

「銀さんに任されたのに、何も出来なかったの……」

なのはは悲しそうな顔で俯いていた。

銀時が体を張って自分をジュエルシードの元まで導いてくれたのに対し、自分は何も出来なかった事が悔しくてなにより悲しかった。落ち込んでいるなのはの頭に銀時は手を置く。

それに気づいたなのははゆっくりと顔を上げる。

「ま、しゃあねえよ。取られたんなら取り返せば良いだけの話だ。

そう自分を責めんじゃねえよ」

銀時はそう言ってなのはの頭をゆっくりと撫でた。

「銀さん……」

なのはは銀時に慰められた事でつい嬉しくなり涙を流しそうになるが、すぐに笑顔を作って言う。

「うん！」

なのはは今度あの魔導師に遭ったら銀時のためにも次は頑張ろうと思っただ。

*

翌日。

銀時は高町家と一緒に海鳴温泉来ている。

ちなみにアリサは執事の鮫島とすずかは姉の月村忍と一緒に来ている。

何故銀時達と一緒にいるかと言うと、なのはの親である土郎や桃子に誘われて一緒に温泉に行く事になったのだ。

銀時としても温泉と言う心体がリフレッシュできる上に美味しい料理が食べられると思ったのですぐに着いて行くと言った。

そして女湯ではなのは達が温泉に入っていた。

そして、なのはの腕の中には、

「キューキュー！」

オス男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔も赤くなっている。

「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって」

「可愛いね」

一緒に入っているアリサとすずかは勘違いしながらユーノに触れる。

（銀さん！助けて〜！！）

ユーノは念話で隣の男湯に入っているであろう銀時に助けを求めた。だが、魔導師でない彼に念話が届くことはなかった。

*

「良い湯だね」

「そつだな」

銀時と士郎は頭に畳んだタオルを乗せて気持ち良さそうに温泉に浸かっていた。

ユ一ノは届くはずのない念話を銀時にずっと送っていた。

*

温泉を上がった後、なのはは銀時にアルフと会った事を話した。

「マジでか？だってあれ……犬じゃなかったか？」

銀時はアルフの事を犬と言った。

狼なのにね。

なのははそのままアルフが脅してきた事も話した。

「それでやめんのか？」

銀時はなのはに訪ねた、

「やめません。誰かが傷つくなんて嫌だから……」

なのはは銀時にそう言った。

銀時はフツと微笑みながらなのはの頭を撫でた。

なのはは顔を赤くしながら笑っていた。

銀時はなのはを撫でるのをやめて立ち上がった。

「何処に行くんですか？」

なのはは銀時に訪ねた。

「ちよつくら出掛けてくらア」

銀時はそう言う外に出て行った。

*

銀時は旅館の周りを歩いていて、旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。木の上にフェイトが座っていた。

(やっぱな)

銀時はアルフが居るのならフェイトも居るのではないかと思い探していたのだ。

「おーい」

「……」

銀時の声に驚きフェイトは『パルディツシュ』を取り出した。

フェイトは銀時を睨みながら警戒している。

「いや、別に戦いに来た訳じゃねえから」

銀時はそう言うがフェイトは警戒を解かない

「坂田銀時……何か用？」

フェイトは警戒しながら言う。

「銀時で構わないぜ」

銀時はそう答える。

「それじゃ、銀時……何か用？」

もう一度銀時に言った。

「何……たまたま見つけただけだよ」

銀時はそう言った。

「そう……」

フェイトはまだ銀時を睨んでいる。

「なあ、フェイト、お前は何でジュエルシードを集めてんだ？」

「それは言えない」

フェイトは銀時の問いを断った。

「どうしてもか？」

「どうしても」

銀時がもう一度問うがフェイトの答えは変わらなかった。

「まあ、それなら良いや」

銀時は旅館に戻ろうとする。

「銀時……何しに来たの？」

フェイトの言葉に銀時は振り返った。

「だから言っただろ？ たまたま見つけたただけだって」

銀時はそう言った。

フェイトは思った。

敵の魔導士の味方である銀時だが、何故か信頼が出来る気がする…

…。

フェイトは考えて口を開いた。

「銀時に私がジュエルシードを集めてる理由を言っ」

銀時はそれを聞いて止まり、フェイトは銀時に近づいた。

「私がジュエルシードを集めている理由は母さんの為なんだ」

「お前の母ちゃんの為に？」

銀時はフェイトの言葉に首を傾げた。

「母さんがジュエルシードを必要としているの。私はそれを集める様に言われたの」

「ジュエルシードは何に使うんだよ？」

銀時はフェイトに訪ねた。

「わからない。集めろって言われたただけだから」

フェイトは銀時にそう言った。

「そうかい。これはなのはに言わないで置いてやるよ」

銀時はフェイトの頭を撫でながら言った。

フェイトは顔を赤くしながらくすぐったそうにしていた。

「ま、お前はガキなんだからちつとは周りを頼れよ。アルフって言う最高のパートナーも居るじゃねえか」

「うん」

「それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえがお前が危なかったら助けてやるよ」

「え！？」

フェイトは銀時の言葉に驚いた。

「でも、それじゃあ」

「だから言つたる？俺はなのはの味方だからお前をそんなに助ける事は出来ねえが……でも、お前が困っていたら助けてやるからよ」

銀時はそれだけを言うつと旅館に戻つていった。

フェイトは顔を赤くしながら銀時の背中を見送つた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃあ質問行こうか」

フェイト「まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問します」

1・ミラクル に質問。なのはがちみの事を好きだと言つてました
がどうしますか？ニヤ（・）（・）ニヤ

2・なのはに質問。なんでも銀さんがあなたと結婚したいと言つて
ますが、どうしますか？

3・銀龍に質問。あなたが一番苦手な人は誰ですか?』まずはミラクル」

ミラクル 「フェイトちゃんまで!?それよりも黒龍!それ本当!」

なのは「そんな事言っていないよおおおおお!」

ミラクル 「なのはちゃアアアアアん!」

ミラクル はなのはに向かって走り出した。

なのは「にゃああああああああ!」

ミラクル 「ぎゃあああああああ!」

なのははミラクル にダイバインバスターを撃ち込んだ。

なのは「黒龍さん!嘘をつかないでえええええええ!」

なのはは黒龍さんに向けてスターライトブレイカーを撃った。

銀八「おい!二つ目だが」

なのは「本当ですか銀さん!」

銀時「んな事言ってるねえよ!黒龍の嘘を信じるんじゃない!それに子供じゃ無理だろ!」

なのは「それじゃ大人になったら良いんですよ!」

銀時「そう言う問題じゃねえ!」

なのはと銀時はそんなやりとりをしていた。

ナナフシ「ヤケドはありませんけど煤まみれになりました……オリキャラですが、投稿しても構いませんよ。オリキャラを見て使うかわらないか決めるので」

銀八「先に二つ目を答えたよ！で、ユーノどうなんだ？」

ユーノ「うん、たぶんフェレットにしかなれません」

銀八「まあ、原作ではフェレットだからな。と言う訳で『月光閃火』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「次です。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『さあ、質問行きましょ

雷雅へ

神速剣術の剣心を如何思いますか？

銀さんへ

今回の格好ってコスプレになるんじゃないんですか？つまりコスプレマニアなんですね。

ミラクルさんへ

地獄汁を送りますから誰かに飲ませて遊んで下さい。て言うか全員に飲ませてほしい』って三つ目怖いんですけどそオオオオオ！」
フェイトは三つ目を見て驚いた。

フェイト「最後の質問です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問
『はあくい、またまた質問おくらせていきまゝす。では、
・ナナフシさんへ、また、コラボするんですか？（コラボするんだ
ったらさっさと行って、断られて、玉砕して、落ち込んでる。）
あつ、ちなみに私ナナフシさんけっこうすきですよ。（いじりがい
ありそうだから。）』ナナフシ可愛そう」

銀八「一つ目だがコラボなんてしてねえぞ？それにあいつは前向き
だから落ち込みもしねえぞ。逆に「あ、来ねえや！」ってぐらいだ
からな。後、限度を考えろよ。幾ら何でもナナフシは怒りだす時が
あるからな。これ見て結構心痛めたらしいぜ。あいつどっちかって
言うところだから」

フェイト「ナナフシSだったんだ」

銀八「と言う訳で『獄黒』さん限度を考えて質問を送れよ」

フェイト「それではまた次回」

第七訓・温泉では心と身を癒そう（後書き）

ナナフシ「銀さんがフェイトにもフラグを立てた」

銀時「お前がやったんだろ！」

ナナフシ「まあね。それではまた次回」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725z/>

リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

2011年12月14日19時59分発行